

二工一ヨ一ク補習授業校

平成二十五(二〇一三)年度

答辞・送辞

在校生代表 W校高等部一年 カイザー 玉青

卒業式に送辞をするという機会をいただいたとき、正直、一体、どのような言葉を贈ったらよいのだろうと、とても悩みました。考えても考えても、心に残った言葉はこの一言でした。「楽しかった」。

私は、高二の先輩方をいつも遠くから見えていました。一学年しか離れていないのに、なぜかすごく手の届かないところにいる気がしていました。わいわい楽しく騒いでる先輩方の輪の中に入りたいと思っていました。私の中では高一、高二の合同高等部は毎年すごく仲がいいイメージがあり、いつもどうやってその仲を深めているのか不思議でした。

高等部が上がった最初の日、私たち高一は高二の先輩たちと合同のホームルームをしました。他のクラスとの合同は初めてで、少し緊張していました。担任の先生が自己紹介をしようと言って、高一の人から自己紹介を始めました。そこでいきなり、先輩の一人が

「醤油派かソース派かどっち。」

と聞いてきました。高一の皆はキョトンとしていました。勘違いして、食べ物のことだと思って答えた人たちもいて、みんなで大笑いしたことが思い出されます。先輩は、日本人っぽい顔が「醤油」で、ハーフっぽい顔が「ソース」だとその時、教えてくださいました。

「ああ、こういうたわいのない会話を通して、高等部は仲良くなっていたんだなあ。」

とその時、しみじみ感じました。

先輩たちと共に授業を受け、同じ時間を共有してみると、先輩たちは、皆、すごく個性的で、まるで漫才コンビを見ているようなときもありました。とにかく、自由な雰囲気にも包まれた先輩たちばかり。授業中に堂々と寝てる先輩もいれば、落書きをしている先輩もいて、その自由さに少しあこがれたりもしました。たぶん真面目一本だった私たちの学年も少し影響されてしまったと思います(笑)。毎日のたわいのない会話がすごく面白くて、ずっと補習校で先輩たちと一緒に空間にいたいと思うようになりました。

しかし、反面、生徒会で運動会の準備に入ったときは、真顔で先輩らしく私たちが後輩をリードしてくださいました。ずっと下級生として楽しんできた様々

ないイベントの裏で、上級生たちが今までどれだけの努力をしてきたのかわかりました。先輩たちを通して、「上級生としての責任」も学ぶことができました。応援団の練習では、上級生が先輩の全員をまとめて、盛り上がる応援を作らなければなりません。そのとき、先輩たちは

「集中するように。」と先輩たちを叱りながらも、先輩の意見もきちんと受け入れ、みんなで素敵な応援に仕上げることができました。一方的にリードするだけではなく、下級生ともきちんとコミュニケーションしながら、生徒会活動も進めていく、やさしい先輩方でした。

先輩方は、どんな場面をも、「ユーモアと笑い」に変える才能がありました。あの真面目なスピーチ大会でさえも、笑いに変えた先輩たちは、卒業された後、どんなピンチが来ても、きっと「ユーモアと笑い」で乗り切ってくださいることでしょう。

先輩方と作ってきたたくさん楽しい思い出は、私の一生の「宝物」です。来年、先輩たちのいない補習校で今年ほど笑えるだろうか。少し不安ですが、先輩たちが残して下さった「宝物」を、これから来る後輩たちと共有して、補習校をもっと楽しい場としていきたいと思っています。

先輩と過ごした日々は楽しかった、本当に楽しかったです。先輩方はこれから新しい人生の一ページを歩んでいきます。どうかこれから先も、ここで過ごした日々を時々思い出しながら、毎日、笑顔でいてください。この補習校で過ごした日々が先輩方にとっても「宝物」であってほしいと心より願います。

この「宝物」を私たちに残してくださいました先輩方に心から感謝します。本当にありがとうございます。そして、御卒業おめでとうございます。

答辞(一)

W校初等部卒業生代表 三井 大輝

本日は、私たち卒業生のためにお集まりくださり、お祝いの言葉をありがとうございました。初等部六年生としてこの日を迎え、山頂にたどり着いた時の様な晴れ晴れとした気分です。病欠で宿題がたまった時など辞めたくなる事もありましたが、あきらめずに続けてこの日を迎える事ができて本当に良かったです。

僕は三歳の時ニューヨークに来て、五歳で補習校幼児部に入園しました。「あ

いうえお」を初め、今話している日本語はほとんどアメリカに来て覚えたことになりす。未だに読めない漢字があったり、言葉の抑揚に苦勞をしたりしますが、月曜日から金曜日までほとんど英語で過ごしているのに日本語がこれだけ分かって、書けるのが不思議に思えることがあります。それはたった週に一度ですが、七年間という長い年月、補習校に通ったお蔭です。「音読が一番大切」と聞いて、漢字はもちろん、矢印を上に向けて書いたり、下に向けて書いたり、言葉のイントネーションにこだわって音読を頑張るうちに、文章がスラスラ読めるようになりました。僕が音読から得た読む力と自信は大きかったです。

補習校から得たものは日本語の力だけではありません。六年生まで通い続けられたのは良い友達に恵まれたお蔭です。僕の現地校には日本人が一人もいません。同じ英語と日本語の二足のわらじを履いている補習校の友達と一緒に勉強し、時には褒められ、また叱られ、一緒に恥をかきながらやってきたことを嬉しく思います。二年生の時、親も含めてクラス全体で踊ったマイケルジャクソンの「スリラー」や五年生の時、福島の復興を願う募金活動をした桜プロジェクト等の仲間と共有した思い出は沢山あります。その中でも僕が一番楽しかったのは一年生の豆まきです。普段は「人に物を投げてはいけません」と言われているのにこの日はかりは鬼になって下さった保護者のお父さん方をめがけて豆を投げることが許されました。この時とはかりに僕は思いつきり投げました。全クラスの子に豆を投げられてお父さん鬼はさぞかし痛かったと思います。でも僕は本当に楽しかったです。今でも低学年の「鬼は外」と言う声が聞こえると羨ましくなります。でも今は野球のピッチャーを務めるようになった僕が豆を投げるのは幾らなんでも鬼がかわいそうかもしれないです。

あの時のお父さん鬼を初め、様々な形でここまで僕たちを支えて下さった先生や保護者の皆様、そして補習校事務所の方々にも心よりお礼を申し上げます。宿題は必ず提出しましたが、三つスポーツをかけ持ち、時には早退をする僕を「文武両道で行きましょう」と理解して下さった先生方、僕達男子生徒の元気良さを注意しつつも大目に見てくださった先生方に感謝しています。中等部でもまた仲間と頑張ります。見守っていて下さい。

結びとなりましたが、七年間送り迎えをしてくれて、宿題を楽しく教えてくれた両親に深く感謝します。ありがとうございました。

私が補習校に通い始めたのは、身長が今の半分くらいだった八年前です。この前の冬休み、自分の部屋を整理していたら、幼児部にいたときに作った思い出帳が出てきました。そこには、五歳だった私の手形がありました。とても小さくて私は思わず、今の自分の手と比べてみました。まるで別人です。折り紙で折ったチーリップやアジサイの作品を見ながら、補習校で過ごしてきた日々が頭によみがえってきました。

補習校に通い始めるきっかけは、母が「近所のりかちゃんを通っているところに行ってみる。」でした。私は、小さかったので、何も考えずに「行きたい。」と言って、そこからは、宿題地獄の始まりでした。というのは半分じょう談ですが、幼児部で、一番印象に残っているのは、運動会でやった忍者の踊りです。ポリ袋をかぶって金色のベルトで踊りました。ちょっと恥ずかしかったけど、終わった後、「やったあ」という気持ちになりました。

幼児部、低学年のころは、毎日のように母が日本語の絵本を読んでくれました。家には日本語の絵本がたくさんあり、おじいちゃんとおばあちゃんが送ってくれたり、母が日本から百冊以上持ってきてくれたりしたそうです。寝る前に母が必ず絵本を読んでくれたおかげで、私は本がないと寝られないくらい本が好きになりました。今では、十一時過ぎて隠れて読んで「早く寝なさい」と怒られます。

小学生になると、赤いランドセルをもらいました。宿題が山もり出て、土曜日と日曜日の午前中はつぶれてしまうこともありました。でも、自分だけでなく、同じようにがんばっている友達がたくさんいたので、休み時間に一緒にやったり、猛スピードで土曜日中に終わらせる、ちょっとした宿題サバイバルのコツもつかめてきました。

運動会の綱引きでは、友達と手がちぎれるくらい力いっぱい引張って勝ったのを覚えています。今年も、カフエテリアで上田先生がカレーライス実習をしてくれました。野菜をいためたり、フルーツを並べて、ごうかなランチを友達と試食したのが最高の思い出です。

夏休みには毎年、東京の小学校に体験入学しました。教科書の進み具合が同じで、ほっとしました。日本では、子供たちだけで家に帰ったり、そうじ当番や

おいしい給食があったりアメリカと違う習慣があり、新鮮でした。私は、担任の先生に頼まれて、英語で「くまのぼうさん」の本をみんなの前で読みました。日本の友達が、優しくしてくれてとても嬉しかったです。補習校で日本語を続けていたおかげで、国を超えて友達が出来ました。

小さいときは何も考えずに補習校に通っていました。アメリカの学校で、俳句の時間があつたとき、私は日本語で「古池や蛙飛び込む水の音」を紹介し、先生や友達が「すごい」と言ってくれました。東北大地震のときも、皆、私に日本のことを聞いてきました。アメリカで生活していても、日本語や日本のことをちゃんと知っていることは、とても大切なことだと感じるようになりました。

補習校の八年で学んだこと、それは「続ける」ことの大切さです。私が尊敬する人にアニメ監督の宮崎駿さんがいます。トトロやポニョを作った人です。宮崎さんは引退しましたが、なんと四十年間もアニメを描き続けてきたそうです。その美しい世界は、今も世界中の人を感動させています。ひとつの道を続けていくことが、素晴らしい作品を生んだと思います。

八年前に入學式に立ったステージ、今、卒業生として立っています。日本語の道のりもこれからまだまだ先があります。私も補習校で仲間と一緒にがんばっていきたいです。

最後になりましたが、補習校では、いつも笑顔で工夫いっぱい授業をしてくれた上田先生を始め、たくさん先生方に教わりました。ありがとうございませす。また一緒に勉強したり、笑ったりした友達がいながらがんばることが出来ました。私たちがここまで来られたのは、お父さん、お母さん、弟の浩、おじいちゃん、おばあちゃんたち、家族の応援があつたからです。本当にありがとう。サンキュー。これからもどうぞ私たちの応援団、よろしくおねがいします。

答辞(三)

―校中等部卒業生代表 モンゴメリー 花子

私は幼児部から十一年間、補習校に通っています。楽しい事はかりではなく苦しい事や、辛い事もたくさんありました。何度も、補習校へ通うのは、時間の無駄だと思いました。この時間を現地校の宿題に当てることができたら、と毎週思いました。それに、私に通っているダンススクールの土曜のクラスをとったり、友達と映画や、ゆっくりお買い物にも行けたらと思いい、くじけそうになったりし

たこともたくさんありました。金曜は決まって家へ帰ると、補習校の宿題に追われ、眠くて疲れていても、翌日は授業中に居眠りはおろか、ボーとすることも許されません。

では、なぜ貴重な土曜日に、補習校に通い続けているのでしょうか。今は二人しかないクラスでも、以前は二クラスあつた学年の時もあり、小六の時は、一人でした。人数が多いと授業が中断することもしばしばで、担任の先生に叱られることが多かつたです。けれどクラス全体にパワーがあり、活気がありました。クラス皆仲が良かったのに、帰国してしまつたり、単に現地校の宿題が多いとか、部活動が忙しいとか、友達と遊びたい等の理由で補習校を辞めてしまつたり、気が付くと、理紗ちゃんと二人になっていました。私だって、皆と同じ様に一日に二十四時間では足りないくらい忙しい。毎週、放課後には、ヨガと化学の実験があり、その上ダンススクールに二回通い帰宅は九時半、その合間に山ほどある現地校の宿題を片付け、更に土曜日は補習校へも通います。

クラスの皆が辞めてしまつた時、皆は自分のやりたいことをするために前進しているのに、私は立ち止まつたまま、皆に取り残された様で、正直言って、寂しかつたです。まるで、ヒナ鳥が行き場をなくして、羽を縮めて、ただ、うずくまつている様な、そんな気持ちでした。皆が飛び去つてしまつても、補習校という鳥カゴに通い続けている理由を考えてみました。

一つ目の理由、私がミックスであるということです。学年が上がるにつれ、現地校に使う勉強時間も増えてきました。アメリカで育つ私にとっての優先事項は、現地校です。けれど、私が日本語を学ぶことを止めるということは、日本の祖父母や母の知人など、私を良く知らない人達の誤解を認めることだと思います。日本には、私の外見で、日本語が話せないと思ひ込む人がいます。私は法的にも日本人で、完璧ではないけれど日本語を話せるし、読み書きも出来ます。けれど、私が日本語で挨拶しただけで、誉められるのです。「日本語出来るのすごい」など：認められていない。そんな気がするのです。このような体験が度々あり、日本人である自分が、日本人に、日本人として認められたい、という気持ちが強くなりました。

二つ目の理由は、私がこうして十一年間も補習校に通い続けられたのは、母が私を信じてくれた事。辛い時に、「大丈夫、きっと出来るよ。がんばれ。」と：勿論、私が怠けムードの時は、「タイガーママも小さな子猫に見える程」、母が恐ろしく変化する事もあります。そして、怪しい日本語を使う父も、「日本語が

使えれば、将来絶対良いことがある。」と一貫して言い続けてくれました。家族の応援は、いつも私の背中を押してくれました。そして私には、今年、小学校を卒業する弟がいます。その弟の補習校の目標は、私です。私を通った学年まで、自分も通うと言っています。なので、弟の良きお手本となる為に、姉としてがんばろうと思います。

そしてもう一つの理由は理紗ちゃん存在です。理紗ちゃんとは、年中で知り合ってから親友で、幼馴染というよりも、家族のようです。補習校で遊んで、補習校が終わってから遊んで、それでも遊び足らずに、どちらかの家に泊まって、ずうっと一緒でした。ある日、私達は約束しました。私達のどちらかが補習校をやめる時が、もう一人も辞める時。中で辞めるか、高校まで通って卒業するか、一人の決断が、もう一人の進路を左右します。親友のためにも、私がんばって補習校に通い続けようと思いました。

でも、そんな疑問を抱きながら通い続けてきた補習校生活が、中学三年になり、楽しいと思えるように変化してきました。今年の中三のクラスは、女子二人だけの小さなクラスでした。皆さんは、寂しいと思うかもしれませんが、今年を振り返ると、楽しかった思い出ばかりが、私の頭をよぎります。担任の森先生と三人の時は、男の子の話で盛り上がりたり、国語の時間に歌う毎月の歌を歌いながら、森先生が笑い泣きするまで、ふざけたダンスを踊り続けたり、普通の授業では出来ない様な少々下品なことをして、笑い転げていました。女子だけのクラスだから出来た、楽しいことがたくさんあり、いつも笑いの絶えないクラスでした。それから、昼休みの終わりに毎週隠れる場所を決め、森先生を驚かせることも、私と理紗ちゃんにとって、土曜の一つの楽しみでした。クラスにはいつも笑いがあふれていて、楽しい一年でした。

こうして、担任の先生を初め、諸先生方、良き友、温かい家族に見守られ、鳥カゴに通うのは、自分が立ち止まって動けないからではなく、時が来るまで力を蓄え毎週、毎週、成長し続けているからなのです。だから私も、その時が来たら、より高く、より遠くへ、羽を大きく空一杯に広げて飛び立つことが出来るように高等部に行ってもがんばります。

今、私達はここにいる。そんな紛れもない事実には長いお話があります。その話には一人一人の人生、努力と夢が全部集まっているのです。私はそんな重要な「今」というものを、一時一時小さい頃からずっと大切にしようと思ってきました。でも、いつの間にか日々は忙しくなっていく、時間というものに振り回される様になってしまったのです。

正直に言うと、私は小学一年生の時、友達を作るために日本語学校に入學したつもりでした。でも、私は友達を作るのがとても下手でした。日本語学校のクラスメートは一週間に一回しか会えない上、やっと仲良くなれたと思っただけは日本へ帰ってしまうかやめてしまうかの繰り返しでした。そして、学年が上がっていくにつれ、クラスの人数はだんだん減っていききました。勉強も難しくなってきた、何度もやめたいという気持ちになりました。それでも、なんとか中学校までたどり着くことができました。

私は現地校で中学校に入り、今までと違う雰囲気の学校生活がなんとなく嫌になっていました。クラスからクラスへいつも移動して、クラスメートが変わってしまうからでしょうか。現地校のクラスメイトは毎日見るというのに、あまり仲良くなれた気がしないのです。その上、宿題や授業はだんだん難しくなり、毎日のスケジュールをこなすのに精一杯になっていきました。辛い時、日本語学校のクラスは何度も私の救いとなってくれました。一週間に一日しか会わないのに、現地校よりもクラスの皆や先生方と仲良くなれた気がします。

クラスの皆と習ったこと、やったことや話したことは山ほどあります。中学校に入って運動会はもうすることができませんでしたが、その代わりに色々な新しい行事が増えました。Tシャツ作り、球技大会、夏祭りや冬祭り、百人一首、のみの市やイヤーブック作りなど、とても思い出深い行事をこの三年間やってきました。どれもとても楽しく、全員がそれぞれ責任をもって頑張ることができました。中二のみの市では男子の何人かが「人間的当て」になって幼児部たちを喜ばせてあげたことを覚えています。のみの市やイヤーブック作りでは新しいアイデアを出したり、メールしあったり、皆が協力して頑張ったのでとても良い結果を作り出すことができました。

この中学校三年間は色々なことを習うことができたと思います。小学校のよ

うに国語と算数だけではなく理科や社会も習うことになったのでさらに知識が広まったと思います。この三年間で教科書に出てくるお話や問題をもっと深く、正確に考えられるようになりました。勉強を通してクラスの皆の意見や性格を知ることができたと思います。授業の内容は先生方がよく説明して、面白い経験のお話をしてくれるので内容がとても身近に感じてよく理解することができず。

小学校の初めの頃、日本語学校へ行くのを嫌がっていた私は今、毎週の土曜日を楽しみにしています。日本語学校での中学校三年間は矢のように過ぎていきました。これからは改めて「今」をもっと大切して、頑張って高校へと進んでいきたいです。ふざける私達と集中する私達をうまくバランスして下さる先生方、本当に感謝しています。行事の度、サポートして下さいる保護者の皆様、ありがとうございます。卒業して行く皆、今までありがとう。高校へ行く皆、またよろしく。

答辞（く）

―校高等部卒業生代表 上野 謙人

「補習校を卒業する。」まだ遠い先のことだと思っていました。初等部や中等部のときは、卒業といってもあと何週間かでもたまたま補習校に戻ることは分かっていた。しかし、今回は違います。「今程度の漢字力や読解力で、社会で通用するのだろうか。」最近までの私はこんな不安を感じていました。そして、こんな自分にとって、補習校の卒業証書がどんな意味があるのかも考えました。

しかし、不安を抱えたまま卒業を迎えても意味がありません。私たちは、補習校を卒業する意義を味わって、この会場を出て行くべきなのです。補習校の卒業証書がどんな意味をもつか、補習校生活を振り返りながら考えてみました。そこで私が見つけた一つの答えが、補習校に誇りをもって外の世界に踏み出す原動力だということでした。

中等部に入った最初の二年間、最大の楽しみは運動会でした。徒競走や綱引きなどの競技を待っている間も、待ちきれずにボールを蹴りまわしたり、逆立ちの練習をしたりしていました。また、秋のバザーの時は、コロコロコミックスや「ち亀」のビデオを探したり、漫画を立ち読みしたりしていたのを、今でも覚えています。

私が補習校に誇りをもつようになったのは、高校での生徒会活動がきっかけでした。生徒会で行事の企画に参加していくうちに気づいたことがあります。それは、どの行事でも、皆がそれぞれの役割を果たし、協力し合っていたことです。中学時代遊んでばかりいた自分とは大違いです。

例えば去年の運動会。私が会場に着いたときには、保護者の皆さんや先生たちがテントの設営やトラックの白線引きなど、もう準備が始まっていました。生徒たちも集まって、応援合戦の練習を仕上げていました。その瞬間私には、今日の運動会がスムーズに進行されるとすぐ分かりました。なぜなら、会場にいるそれぞれが、行事を円滑に進めるために必要な自分の役目をしっかりと果たしていたからです。例えば白線を引く人がその役目を果たしていなければ、生徒達はどこを走ればいいのかわからなかったでしょう。ささいなことに見える何か一つでも欠けていけば、全部が動かなくなってしまうのです。補習校はそれ自体がひとつのユニットです。ユニットを動かすのは先生や保護者だけでなく、生徒たちの力も必要なのです。

その年の運動会、私たち白組は負けてしまったけれど、大切なことが実感できたとてもよい思い出として、今でも心に残っています。

こういった生徒会活動から私が学んだことは大きく二つあります。一つは企画する側の責任です。時間の使い方や生徒以外の人たちとのコミュニケーションがいかんにか大事かを知りました。

二つ目は、学年に関係なく、補習校の仲間たちと触れ合うことの大切さです。運動会や秋祭りで小学生たちと話したり遊んだりしたので、まだ私のことを覚えてくれている小学生もいます。最近、中一の男子生徒が高等部の教室に来て、サムライごっこをします。自分が中一の頃は、高校生との交流がほとんどありませんでした。何故、後輩たちがこころも自然に私たちの教室に寄ってくるのか、理由はよく分かりませんが、ふれあいはとても大切だと思います。後輩たちに「高等部はそんなに怖いところではない」と分かってもらえれば、彼らはきっとためらわずに高等部に進学することでしょう。高等部に進学したら、積極的に生徒会活動に励んでくれると、私は信じています。そして、僕が経験したように補習校に誇りをもってほしいです。だからこそ、後輩達、どうか残りの補習校の時間を大切にしてください。卒業は本当にあつという間だから。もうその時が来てしまった私たち高二は、皆さんの補習校の経験を生かして新しい世界へと歩んでいきます。

保護者の皆さん、先生方、そして高二の仲間達。ここまでこられたのも皆さんのおかげです。ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

答辞 (VI)

W校高等部卒業生代表 安倍 結花

つらい時、いつも目を閉じて思い出すことがある。数年前、ある美術館で入った暗い部屋のことだ。その部屋には、手探りでゆっくり入っていく。中があまりにも暗いので、ゆっくり入らないと危ないのだ。みんなぞろぞろと入っていく、その中のベンチのようなものに腰かける。私はとても怖かった。何も見えないし、何も聞こえないので、どこを見ようとすればいいのか分からなかったのだ。でも、しばらくすると小さな光がぼんやり見え始めてきた。もう少し時間が経つと、自由に歩き、その光の所まで行って、部屋を見回すこともできた。その淡い光は、私達が部屋に入って来た時からずっとついていてたそうだった。

私にとって補習校は、この部屋のような存在だった。日本やアメリカの多くの人々は、口をそろえてこう言うだろう。「平和な世界を目指すためにはお互いに理解し合って、受け入れ合うことが大切だ。」と。でも、当時十二歳だった私にはこの言葉はなんの意味もない、ただのきれいなことしかすぎなかった。四歳の頃からアメリカに住んでいた私は、日本とアメリカという二つの文化の間に挟まれ、さんざん悩まされてきていた。幼稚園、小学生の時のようにいじめられはしなくなったものの、中学ではほとんどの人が私と接する時は一線を決して超えない壁を作っていた。なんとなく、本当に微妙にだが、現地校のクラスメート達は私を彼らの中の一人としては見えていなかったようだった。いや、彼らにはどうしても私を同じ仲間としては見られなかったのだろう。少なくとも、その頃の私にはそんな世界が目の前に広がって見えていた。

私は必死だった。彼らに受け入れてもらいたい。好かれない。仲間だと思ってもらいたい。そんな感情が強すぎて、本当の自分が私の中から逃げ始めていた。そんな中で、補習校という存在はますます私を混乱に導いた。日本から来たばかりのクラスメート達に、いま一つついていけず、私は現地校でも補習校でもあまりちゃんとした居場所を築けなかった。「アメリカでそれまでの人生のほとんどを過ごしている私が、なぜ今さら日本の文化を身に付けないといけないのだろう。」「アメリカ人になりたい。アメリカ人になって、みんなに受け入れてもらって、

過去のことなんて忘れてしまいたい。」と、そんなことをちらちら思いながら数々の土曜日が過ぎていった。

「人と人がお互いを分かり合うなんて、本当にできるのだろうか。」私はいつもそんなことを考えていた。「どんな国の人でも分かり合い、受け入れ合うのは当たり前じゃないか。」そんなことを簡単に言う人を見かけると、イラつとなる自分もいた。私のことを分かってくれる人なんて、一人もないじゃないか、私のすべてを見て、受け入れてくれる人なんていないじゃないか。そんなことを彼らに言うてやりたくなくなった。

でもそんな私を変えてくれたのも、この補習校だと今は思っている。時が過ぎるにつれクラスはどんどん小さくなってゆき、クラスのメンバーもほとんどがアメリカに長く住んでいる人になってきた。彼らとは、何となくお互いの気持ちが分かり合えた。何も言わなくても暗黙の了解のように、お互いの悩みを分かち合えるような気がした。彼らと知り合えたことによって、私は周りにもっと心を開いてゆくようになった。日本から新しく入って来た転入生とも全く異なる環境で生きてきたにも関わらず、心が通じる気がしてきていた。私は一人じゃない。みんなも私と同じような思いを持ち、それぞれの形で必死にそれに立ち向かっている。私達はそれぞれまだ幼くて、大人にはほど遠くて、この大きな世界で一人立ちするのにはものすごく無力だった。暗い中を手探りするように生きていて、よく転んだ。それはとても怖かった。でも、一人ではなかったのだ。補習校に長年通い続けて、それに初めて気づいた気がした。

今でも私は、誰かが他の誰かのすべてを分かってくれようとは思っていない。人間というのは結局孤独な生き物で、これから先もずっとそうであろう。でも同時にこうも思う。すべて分かり合えないからこそ、私達は一緒にいられるのだ。時が経ち、私達は成長し、世界が変わり、遙か昔に補習校で習った漢字や、数学の公式が頭から離れてしまふ時が来たとしても、このことだけはしっかり私の心の中に生きていてであろう。人間は、孤独だけど、一人ではないのだ。孤独だからこそ、暗い中、手をつなぎ、よりそって生きてゆけるのだと思う。だから、十二歳だった私にもこう伝えたい。自分だけが大変だなんて、絶対に思わない。自分だけが頑張っているなんて、決して決めつけない。いくら手探りしたっていい。迷ったっていい。どんなに暗い夜でも、私達は一人ぼっちではない。暗くて周りが見えなくても、少し時間をおけば、目がなれて、周りが見えてくるのだろうか。

これから先の長い人生には、暗い夜も訪れるだろう。でも、その暗やみの中には私を見守ってくれている人達がいるのだということが私には見える。これまでの十一年間私達を見守り支えてきて下さった先生、友達、そして家族、ありがとうございます。そして、これから始まる私達の未来を支えてくださるであろうみなさん、よろしくお願い致します。私達は、自分の足で、一步一步、しっかりと歩いて行きます。

